

《寄稿》映像は、やがて社会の遺産へ ～フィルムアーカイブの目指すもの～

佐藤 浩司氏 (株式会社エイチ・ビー・シー・フレックス 営業本部 副本部長)

古フィルム探索は冒険感覚!?

道内山間部の廃校となった小学校。教室の片隅に100本を超すフィルム缶が眠っていました。私たちは、様々な情報を元に所有者の許可を得てフィルムを探しに行きます。これが、インディ・ジョーンズの秘宝探しに似た感覚もあって、とても刺激的です。…と書いても、本業は創業から70年の札幌の映像制作会社です。普段はHBCニュースや情報番組、ラジオ制作、官公庁の映像制作やイベント運営をする企業です。建設業界の年配者には、道路や橋などの記録映画を制作した「HBC映画社」という旧社名が分かりやすいかもしれません。

フィルム調査で新たな発見も

営業本部では、業務の一環で自社制作した1000本超の16～35mm映画フィルムを最新のデジタルフィルムスキャナーでデータ化しています。昭和30年代の青函トンネルや各地の国道建設、北海道



最新のデジタルフィルムスキャナーでの映画フィルム復元の様子

開発局の30周年記録など社会インフラに係わる作品が数多くあり、内容調査で地域の忘れられた風景や地域史の新たな発見に繋がることもあります。



学校から引き揚げたフィルムの一部。この後、映像内容と著作権調査を実施

“記録と記憶”が映像遺産に

私たちが果たすべき社会的な責任は、

地域の来し方行く末を記録と記憶として残すこと。そんな思いもあり、時には大正～昭和初期のフィルムを探しに出かけます。記録と記憶を積み重ねて作り続けるコンテンツは、やがて地域の映像遺産に。映像は100年残せば、どこの市町村でも立派な文化財に変わります。映像を歴史的な財産に残すことで、次世代の人たちが地域を知る機会ができたり、未来に活かされていくことを願いながら、時々古いフィルムを探す旅を続けています。



データ化した青函トンネル先導導坑 貫通式 昭和58年 本州の風が北海道側に吹き抜けた



令和6年度 dec定時総会のお知らせ

令和6年度dec定時総会を下記の日程で開催いたします。開催方法等詳細につきましては、会員の皆さまに後日文書にてご案内申し上げます。

◆日時: 令和7年5月30日(金)

「シーニックドライブマップ 2025年度版」発売! 定価250円(税込)

🏠「道の駅」マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!



好評販売中!

編集後記 先日、中学生の子どもの卒業式に参加しました。思い返すと私が卒業した中学校は当時は少々荒れた学校ということもあって、合唱を一生懸命歌うなんて恥ずかしい…という環境でした。先生から「もっと声出せ!」なんていう怒りを浴びせられることもしばしば。合唱にそんな思い出しかない私ですが、式場に入った瞬間、在校生たちが卒業生に贈る合唱の練習をしていたのですが、その凛々しく大きな歌声に、席に着く前から涙が。若いって、青春って、一生懸命って素晴らしい…! 式では号泣でした。(R.W)



合唱のことばかり書いてしまいましたが、会場全体が感動の涙に包まれ、とてもいい卒業式でした。

dec monthly vol.475

2025年4月1日発行

発行人 倉内 公嘉

発行所 一般社団法人 北海道開発技術センター 〒001-0011 札幌市北区北11条西2丁目2番17
TEL (011) 738-3361 FAX (011) 738-1886 URL <http://www.decnet.or.jp/> E-mail dec_info01@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2025.4.1 vol.475 デックマンスリー



● Monthly Topic (マンスリートピック)
第24回 野生生物と交通研究発表会
● dec Report (デックリポート)
IENE2024 in Prague参加報告

dec Interview >>> 環境省 北海道地方環境事務所 所長 山本 麻衣氏

7つの国立公園、14の国指定鳥獣保護区を擁する北海道。その豊かな自然の保全と適切な利活用推進の先頭に立つ行政機関が北海道地方環境事務所です。昨年7月に所長に着任された山本麻衣さんにご自身の歩みや同事務所の取り組みについてうかがいました。

国の環境行政は幅広いですが、国立公園管理や生物多様性保全など自然環境保護のお仕事を各地でされてこられました。北海道は初めての赴任ですね。

今までの赴任地は東京以西で、最北端は長野県松本市でしたから、一気に北上しました(笑)。北海道に来て実感するのは、国立公園が本当に素晴らしいこと。自分たちが所管するものに感心するのは恐縮ですが、やはり北海道の国立公園の景色は別格だと感じています。原生的な自然はもちろんですが、広大な畑や牧草地など人がつくりあげてきた農村景観も素晴らしく、あらためて北海道は凄いなと思いました。

出身は山口県の瀬戸内海側にある下松市で、大学から東京です。東京大学農学部で緑地学を専攻し、卒論は多自然川づくりに関するテーマでした。1995年に卒業して環境庁(2001年から環境省)に入り、最初は本庁の野生生物課でワシントン条約や渡り鳥等保護条約など国際条約の仕事に携わりました。その

後、東京勤務をはさみながら各地に赴任しました。

地方勤務の最初は長野県松本市(中部山岳国立公園管理事務所)で、外務省出向(経済協力局)をはさんで長崎県対馬市(対馬自然保護官事務所)へ。その後、本省国立公園課を経て沖縄県那覇市(沖縄奄美自然環境事務所)に。世界自然遺産登録を目指すこの地域では新しい国立公園指定に向けた準備の仕事に携わりました。「やんばる国立公園」は2016年、「奄美群島国立公園」は17年に指定され、世界自然遺産「奄美・沖縄」は21年に登録された。

再び本省に戻って野生生物課に4年ほどいて手がけたのは鳥獣保護法の改正でした。その後、長崎県庁に出向(自然環境課長)し、本省自然環境局に戻って温泉地保護利用推進室長、希少種保全推進室長、生物多様性戦略推進室長と務めてきました。生物多様性条約締約国会議に出かけるなど国際的な業務を含めさまざまな経験をしてきましたが、基本的にはずっと自然環境保護に関する仕事をしてきました。

では、これまでで最も印象的なお仕事を挙げていただくとすれば。

現地に入ってからのお仕事では対馬ですね。2001年ごろのことで、対馬自然保護官事務所にはスタッフは何人かいるものの職員は私一人で、相談する上司も近くにおらず、「野生生物と地域」という課題に

自然環境の保全と利用は、地域にプラスをもたらすものでなければと取り組んできました。ネイチャーポジティブ実現のためには、企業や自治体など幅広い力をお借りしていきたい。

dec Interview

やまもと まい
1972年山口県生まれ。95年東京大学農学部卒業後、環境庁(当時)入庁。本庁野生生物課を皮切りに長野県松本市、長崎県対馬市、沖縄県那覇市などで国立公園管理や野生生物保護に従事。2017年自然環境局温泉地保護利用推進室長、20年同局希少種保全推進室長、22年同局生物多様性戦略推進室長を経て24年7月から現職。趣味は長野県在任時に親しんだ登山。現在は藻岩山など札幌近郊で足慣らしし、羊蹄山、利尻山、旭岳など道内の主峰を楽しむ。

向き合い、深く考える機会になりました。

ツシヤママネコ(絶滅危惧IA種指定)が息づく自然を保全するために、地域にはさまざまな制約があり、住民にとってマイナス面もあります。しかし、ツシヤママネコは対馬という地域の特徴を示し、魅力にもなっている。保全が地域にとってプラスになるようなかたちとはどのようなものなのか、地域の人たちと膝詰めで議論を重ね、方向性を考えていきました。この体験は当時20代終わりから30代の私にとって、自分の仕事の仕方のようなものを固めていく重要な転機になりました。

一方、東京の本省で取り組んだ仕事で心に残るのは鳥獣保護法の改正(「鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律」15年施行)です。北海道では近年、エゾシカやヒグマが人の生活に大きな影響をもたらす、まさに人と野生生物との戦いになっていますね。それでも明らかなように、希少種の保全の影響は地域の一部にとどまるのですが、増えすぎた野生動物の問題はかなり広い範囲で多くの人の生活に影響を与えます。野生動物による被害増加や生態系への影響が全国的に深刻化し、捕獲による管理が求められるなかで、環境省の法律のあり方をどう変えていくのか、農水省や警察庁など関係省庁とも議論して取り組みました。大変でしたが、人の生活を守るために一緒に何ができるか、一体感を持って検討するなかで法改正が実現したと思います。

北海道では昨年6月に「日高山脈襟裳十勝国立公園」が誕生。10月には「阿寒摩周国立公園満喫プロジェクト」の取り組みの一つである「北海道東トレイル」が開通しました。

現在、私たちが注力しているのが「日高山脈襟裳十勝国立公園」のビジョンや管理運営方針などの検討です。そのため国や道、地元自治体、自然保護団体など関係機関から成る協議会を設立しており、地域の方々にも参加いただいて議論を進めているところです。新たな国立公園を確立していく上で今がまさに大事なタイミングで、しっかりとっておかなければと思っています。

その他の道内6国立公園についても、インバウンド増加のなかでどのような新たな対応や整備が必要なのか考えていかなければなりません。それぞれの公園ごとに地域の方々も交えて議論し、検討していくことが必要です。

「北海道東トレイル」は、知床、阿寒摩周、釧路湿原の3つの国立公園を結ぶ約410kmのロングトレイルです。ロングトレイルのうち、環境省が設定する長距離自然歩道も全国に10あり、これらは歩道を新たにつくるというのではなく、もともとある道をつないで路線を設定します。近年の開通では東北太平洋岸自然歩道(みちのく潮風トレイル)がありますが、北海道東トレイルは3つの国立公園をつないで設定されたという点で全国初のロングトレイルです。

最近、ロングトレイルの良さが注目されるようになっていますが、特に欧米の人々には好まれる旅のスタイルもあり、環境省や地元自治体などが連携して道をつなぐことで地域の良さを見せていくことができればと思います。そういう意味で道は大切ですね。

国交省北海道開発局が推進する「シーニックバイウェイ北海道」については、decは長年、活動の実務をサポートしてきましたが、各地で環境省の方々とのつながりや協力をたくさんいただけてきました。

実は先日、知床方面に流水を見に行き、シーニックバイウェイ北海道(以下「シーニック」と略)の「秀逸な道」(国道334号の斜里町〜ウトロ間)を通ったり、喫茶店でフリーペーパーの冊子「Scenic Byway」を見つけたりと、シーニックの活動の一端に触れることができました。

そして、あらためて思ったのは「秀逸な道」から見える景色の多くの部分が国立公園だということ。つまり、シーニックとは多くの人に国立公園の景観を楽しんでもらっている道でもあると思いました。「この美しい景色を保全しているのは私たちです」と言いたくなるのですが(笑)、道路があるからこそ国立公園の魅力が堪能できるのです。

もともと国立公園の仕組みとして、最も規制の厳しい特別保護地区を頂点に規制の強弱で第一種から第三種までの特別地域、規制外の普通地域と地種区分が設けられています。特別保護地区に至る道路は公園事業道路として位置付けられ、その沿道は特別地域として普通地域より地種区分が上げられることもあります。つまり、沿道は景色を味わう場所なので、それを損なうものがいろいろつくられても困るし、もともと樹木をたくさん伐られては困るから、規制をかけて守る、というような思想で公園計画図がつくられているのです。

先日の知床の「秀逸な道」では、道路から流水が見えやすいように、機械除雪で海側のガードレールにできた雪の壁を取り除く作業をシーニックの活動でされているそうですね(「東オホーツクシーニックバイウェイ」が毎冬実施しているガードレールの雪かき活動)。沿道の景観を保全するというシーニックの活動は、私たちの国立公園管理ともリンクする、ありがたい取り組みだと感じています。

国は2030年までに「ネイチャーポジティブ(自然再興)」の実現を目指しています。その目標に向けた環境省の取り組みが「自然共生サイト」とのこと。どのような取り組みなのでしょう。

まず、「ネイチャーポジティブ」は「自然を回復軌道に乗せるために生物多



「秀逸な道」国道334号(斜里町)東オホーツクシーニックバイウェイ

性の損失を止め、反転させる」ことで、2022年の生物多様性条約第15回締約国会議で定められた世界目標「昆明・モントリオール生物多様性枠組」の達成に向けたわが国の取り組みです。

具体的な取り組みはさまざまな領域で広汎に及びますが、例えば、シマフクロウの交通事故を防止するために橋の欄干にポールを立てることなどもその一つ。ロードキル対策などを議論しているdecさん主催の「野生生物と交通研究発表会」はまさにネイチャーポジティブの取り組みですね。

環境省ではネイチャーポジティブの啓発のために23年にイメージキャラクターとその愛称を公募し、誕生したのが「だいだらぽじー」です。日本各地で山や湖、川をつくったと伝承されている巨人「だいだらぼっち」と「ポジティブ」からもじって名付けられています。かわいいと人気を集めつつありますが、広く親しまれるようになってほしいですね。

「自然共生サイト」は、民間などの取り組みによって生物多様性の保全が図られている区域を環境省が認定する取り組みです。地域の里山や企業敷地内の緑地、大学のキャンパス、バードサンクチュアリなど、企業、自治体、団体、個人によるさまざまな取り組みによって、本来の目的にかかわらず生物多様性の保全が図られている区域について、一定の基準を満たした場合に認定し、その貢献に対して認定証を発行させていただいています。また、認定された地域は、保護地域との重複を除いてOECM(Other Effective area-based Conservation Measures:保護地域以外で生物多様性保全に資する地域)として国際データベースに登録されます。認定は23年に始まり、これまでに全国で328カ所、北海道

では16カ所となっています。

近年、民間企業の間では脱炭素の取り組みが活発化していますが、それに加えて生物多様性保全にもしっかり取り組んでいこうという動きが生ま

れています。これは国際的な流れであり、例えば、TNFD(The Taskforce on Nature-related Financial Disclosures)という企業が自然環境にどうにかかわりを持っているのかを情報開示するしくみがあり、生物多様性保全が企業の評価指標やビジネスとして注目されるようになってきています。このような動向のなかで、何かできないかと検討する企業が増え、自然共生サイトにも関心を寄せていただいているのだと思います。

環境省の力だけでなく、民間企業や自治体、地域のさまざまな立場の人の力を得ながらネイチャーポジティブ推進を盛り上げていくという意味で、自然共生サイトは重要な取り組みだと考えています。

日本が観光立国を標ぼうするなかで、自然環境の保全と



だいだらぽじー

利活用はどう向き合うか、今後は新たな発想の取り組みが求められそうですね。

国立公園の法律には本来、自然の保護と利用の両方がうたわれているのですが、環境行政の歴史を振り返ると、各地で大規模開発が急速に進められた高度成長期には、自然保全のために開発にストップをかけたり、制限することが多くありました。「環境庁は保全第一で、国立公園は保護ばかりだ」などと言われる理由の一つにはそういう歴史があるからでしょう。しかし、高度成長期に保全を重視したことは大変意味のあることだったのではないかと考えています。保全してきたからこそ、今があるのです。

現在は高度成長期と異なり、社会も成熟して大規模開発を強引に進める時代ではなくなっています。自然を利用するときもおかしな開発ではなく、適切な整備により保全が図れるようになった。そういう意味では、長年守ってきた自然環境をうまく活用できる時代になったと感じています。

私たちの仕事では、常に自然環境の保全と利活用のバランスをうまくとることを大事にしてきました。今後はさまざまな方面の力をお借りしつつ、時代に対応したいろいろな手法を模索しながら、自然環境に負荷をかけず、地域の経済にとってプラスになる利用のあり方を追求していきたいと思っています。

※2025年4月現在

	北海道の「自然共生サイト」※	所在地	申請者名
1	北海道大学札幌キャンパス	札幌市	国立大学法人北海道大学
2	マテリアルの森 手稲山林		三菱マテリアル(株)
3	エコニクスの森林[もり]	網走市	(株)エコニクス
4	デンソー網走テストセンター		(株)デンソー
5	三井不動産グループ保有林「ユードロマップ」	留萌市	三井不動産(株)
6	出光興産(株)北海道製油所	苫小牧市	出光興産(株)
7	トヨタ自動車北海道(株)		トヨタ自動車北海道(株)
8	トヨタ自動車 士別試験場	士別市	トヨタ自動車(株)
9	渡邊野鳥保護区フレシマ	根室市	(公財)日本野鳥の会
10	北海道キッコーマン 樹林地	千歳市	キッコーマン(株)
11	歌才湿原	黒松内町	黒松内町
12	添別ブナ林		
13	北海道大学雨龍研究林	幌加内町	国立大学法人北海道大学
14	史春森林財団 生花の森	大樹町	(一財)史春森林財団
15	北海道池田町大森地区町有林	池田町	池田町
16	ニッタ(株)「十弗の森」	豊頃町	ニッタ(株)



日高山脈(日高山脈襟裳十勝国立公園)

特別講演

「野生生物と交通」研究発表会と歩んだ24年：49回の発表を振り返って

柳川 久氏(帯広畜産大学教授)



講演の様子

野鳥保護から始まったロードキル研究

1988年に母校の帯広畜産大学の教員となり、間もなく携わったのは北海道からの依頼で大学や動物園が行う野生傷病鳥獣救護でした。野鳥の傷病原因を調べると1位はガラス(窓)衝突、2位はロードキル26%と人為的死因が多くを占める実態に胸を痛めました。

そうしたことを契機にロードキル研究を進めようと96~98年、周囲の協力を得て哺乳類、爬虫類、両生類の約1500の死体を収集、分析しました。エゾアカガエルが最も多く、主因は越冬地と産卵地の間にある道路を産卵期にオスを乗せたメスが歩道の段差を越えられないためとわかり、北海道開発局の協力で段差を削ると事故は激減しました。エゾリスの対策では道路の上を渡るアニマルパスウェイを、モモンガは道路脇に棒を立て、そこから滑空して渡れるようにするなど、エゾシカを含めロードキル対策の試行を重ねました。

コウモリの「移」、「食」、「住」を守る

最も多く扱った野生動物はコウモリです。野生動物の保全は、まず環境アセスメントで生物の種類を調べ、改

変について「回避」「低減」「代替」を選びます。動物がそこにいる理由は①「住」(巣がある)、②「食」(餌をとり来ている)、③「移」(移動中)の3つで、そのどれが大切かを調べ、それに対応する資源が損なわれなければ動物はそこに棲み続けられます。高規格道路工事に伴う芽室町北伏古の湧水地の保全では、コウモリは8種類おり、各々の「移」「食」「住」を踏まえて門型カルバートや人口池、バット・ボックス(巣箱)などの設置を行いました。その結果、12年目のモニタリングで初年に標識をつけたコウモリが繁殖を続けていたことがわかりました。この高規格道路工事に関しては、コウモリの「移」の確保のために防風林の廊下の保全にも取り組みました。

「ヒグマの道」保全と林業の両立を求めて

退官まで後3年という時期になって初めてクマの研究に取り組むことになりました。苫小牧市が一時、IR計画を検討した関係で環境アセスメントを実施したところ、「ヒグマの通り道」保全が課題となったのです。2021年度から3年計画で、住友林業管理の森林約900ha(苫小牧市植苗ノーザンレーシング社有林)で「モントリオールプロセス」という生物多様性保全を

重視した森林経営の枠組みに基づき、林業とヒグマの存在の両立の可能性を探りました。自動撮影カメラなどでヒグマの移動経路を調査し、空間的、季節的、時間的な棲み分けを検討。「ヒグマコリドーエリア」を確保し、別に人口水場を設けた「水場エリア」、生物多様性向上のために植林などを行う「林業エリア」を設けたところ、成果が上がり、取り組みは「社会・環境緑地評価システム(SEGES)」の「そだてる緑」2024認定サイトに指定されました。

私の取り組みについては、この研究発表会で多数発表させていただき、数々の自著も出版されて大変ありがたいことです。これからも「ロードエコロジー」の考え方にに基づき、道路をポジティブに捉える見方も含め、野生動物と道路の関係を見ていくことができると思っています。 文責:dec

柳川先生の著書! 北の大地に輝く命 野生生物とともに

柳川 久 著(東京大学出版 定価3,300円)

野生動物も人間も、被害者にも加害者にもならず、ともに生きていくために! 小さなエゾモモンガから大きなヒグマまで、そしてエゾリスなどの普通種からタンチョウなどの希少種まで、豊かな大地に暮らす野生動物の存在と人々の生活を両立させるためのさまざまな挑戦。



「野生生物と交通」研究発表会



開会挨拶の様子

ロードキル対策など「野生生物と交通」に関する全国的にも貴重な情報交換の場として歴史を重ねてきた標記研究発表会。今年はdecの倉内公嘉理事長の開会挨拶に続き、同発表会の第1回(2002年)から今年までのほぼ毎年、計49件の研究発表をされ、会の進展に貢献されてきた帯広畜産大学の柳川久教授(今年3月退官)の特別講演が行われました。分科会は①「緑化・保全」、②「鳥類」、③「対策・活用」、④「ロードキル」の4テーマに13編の発表が行われ、パネル展示は9団体が参加して交流が深められました。

【2025年2月28日/主催:dec、会場:札幌コンベンションセンター】

Table with 2 columns: Topic (特別講演, 第1分科会, 第2分科会, 第3分科会, 第4分科会) and Speaker/Content. Topics include 'Wildlife and Traffic' symposium, road projects, bird protection, roadkill research, and roadkill countermeasures.

動物侵入対策立入防止柵(株)日本パーツセンター札幌支店 ■アーク放電を利用したクマ防草システム(株)日本パーツセンター札幌支店 ■IoT自動撮影カメラとAI搭載クラウド(株)ハイグ ■ヒト由来マリン・サポニン採用!シカ忌避テープDeerBlock(ハーテック・バイオセクター(株)) ■害獣侵入防止装置「わたれません」,「わたれませんLIGHT」(株)赤城商会 ■「ロードキルの学習」による根室地域学習の取り組み一だれにとっても、安全安心な根室の道を目指して-[釧路根室みち学習検討会・根室ワーキング、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム、釧路開発建設部道路計画課] ■シン6次産業[長野県上伊那農業高等学校] ■「野生生物と社会」学会の紹介[「野生生物と社会」学会] ■シーニックバイウェイ北海道の活動紹介[(一社)シーニックバイウェイ支援センター]

IENE2024 in Prague参加報告

鹿野 たか嶺 (dec主任研究員)

2024年9月8日～13日にチェコ共和国の首都プラハ、チェコ生命科学大学にて開催された、IENE International Conference Prague 2024に、地域政策研究所の原所長、佐藤(真人※以下、佐藤)、鹿野の3名が参加してきましたので、ご報告いたします。

IENE (Infrastructure & Ecology Network Europe) は、1996年に発足した、交通インフラと生態系の共存を目指す国際ネットワークです。ヨーロッパを中心に、道路・鉄道・エネルギーインフラが野生動物や生態系に与える影響についての情報交換の場として2年に1回会議が開催されています。decは2010年より参加しています。今回は、約40か国から325名の対面参加者と52名のオンライン参加者が集まり、中国、韓国、台湾などアジア圏からも参加していました。「野生動物と交通」研究発表会で交流のあった研究者の方々との再会もあり、有意義な機会となりました。

今回の会議のテーマは「Biodiversity in the Light of Future Transport (未来の交通の観点から見る生物多様性)」であり、技術の進歩と生物多様性の保護を両立させる必要性を強調し、特に気候変動とそれが交通システムや技術に与える影響を考慮する重要性を訴えました。基調講演や全体セッションでは「成長の限界の必要性」と「地

球規模の持続可能性に向けた交通の根本的な見直しの必要性」が公の議題として取り上げられました。

また、小学生による絵画展示もあり、会場のあちこちに展示され、会議に華を添えていました。これは、ぜひ「野生動物と交通」研究発表会でも取り入れたいと思いました。フォトコンテストも開催され、鹿野が応募した写真が入選作品に選ばれ、会場内モニターで流れていたのですが、残念ながら大賞は逃してしまいました。

余談ですが、開催期間中は毎日コーヒープレイクが設けられ、会場内でコーヒーマシンの飲みながら参加者同士が交流できる時間がありました。交流の時間はとても重要であると感じたため、今年開催した第24回「野生動物と交通」研究発表会では

コーヒープレイクの時間を設け、参加者からは大変好評でした。

《発表について》

今回は、佐藤と鹿野がポスター発表を行いました。佐藤は「Effectiveness of road-surface warning markings to prevent sika deer-vehicle collisions in Japan」というタイトルで、路面表示による注意喚起についての発表を行いました。内容は、北海道の道路で路面表示を用いたドライバーへの注意喚起対策を実施し、その効果を検証したものです。調査の結果、路面表示はドライバーの認識向上や減速につながり、事故件数の減少が確認されたこと、ただし、道路の形状によって効果に差があることや、表示の摩耗による視認性低下が課題として挙げられたことを報告しました。

鹿野は「Road-side visibility improvement by weeding to prevent vehicle-sika deer collisions prevention measure」というタイトルで、除草による視認性向上についての発表を行いました。内容は、植物の繁茂により視認性が低下している区間を対象として除草対策を実施し、効果検証を行ったものです。その結果、除草によりロードキルの減少や、シカ出没時の車両速度の低下が確認された



ポスター発表の様子

ことを報告しました。

ポスターを見に来てくれた方とは、「フランスではゴミのポイ捨てが多いので、除草をしたらロードキル対策にも、ポイ捨ての抑止にもなってちょうどいい」、「道路沿いの除草をすると、昆虫の道路横断にとってはマイナスかもしれない」といったご意見を頂きました。昆虫のロードキルのことまで考慮していなかったのですが、確かに希少昆虫の多い地域などでは考慮すべき内容であると思いました。

《エクスカーションへの参加》

IENEでは、5本のエクスカーションが企画され、私たちは、南ポヘミアの動物用横断施設等を視察するエクス

カーションに参加しました。鉄道路線の動物用アンダーパスや、高速道路のオーバースタック、送電線の鳥類の衝突・感電対策等を見学しました。

中でも印象的だったのはオーバースタックです。ヨーロッパのオーバースタックは非常に大きく、スケールの違いを感じました。日本ではなかなか野生動物のためにこのような大規模なオーバースタックの建設は難しいのが現状です。利用する動物種は増加傾向にあり、ノロジカやノウサギの利用が多いという、モニタリング調査結果も教えていただきました。高速道路では、フェンスも併せて設置されていたのですが、オーバースタックのフェンスに丸太が使用され、道路側の視界を遮る工夫がありました。動物以外の点ですが、フェンスの強度

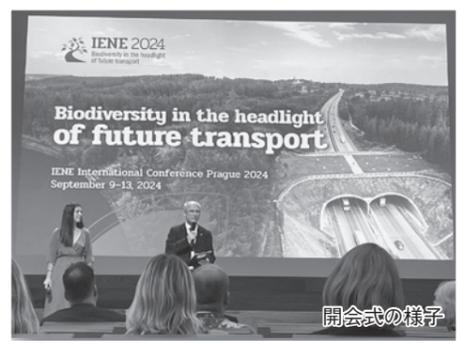
が気になりました。北海道では、積雪を考慮して頑丈なフェンスが設置されているのですが、それでも壊れてしまうことがあります。チェコで設置されているフェンスは、明かに強度が低く、積雪の有無による強度の違いを感じました。

《参加を通じて》

今回、海外で開催された国際学会に初めて参加させていただき、様々な国の取り組みを知ること、また実際に目で見ることはとても大切だと実感しました。IENEはヨーロッパでの会議ですが、アジアからの参加者もいたことから、今後IENA (インフラ・エコ・ネットワーク・アジア) が開催できれば!と思います。「野生動物と交通」研究発表会は、来年25周年を迎えます。25回目に相応しい何かを企画できれば...と考えています。



オーバースタック



開会式の様子



小学生による絵画展示(左上)とフォトコンテスト入選作品モニター(右)



オーバースタックの説明を受ける



アンダーパス



フェンスに丸太が使用された広大なオーバースタック